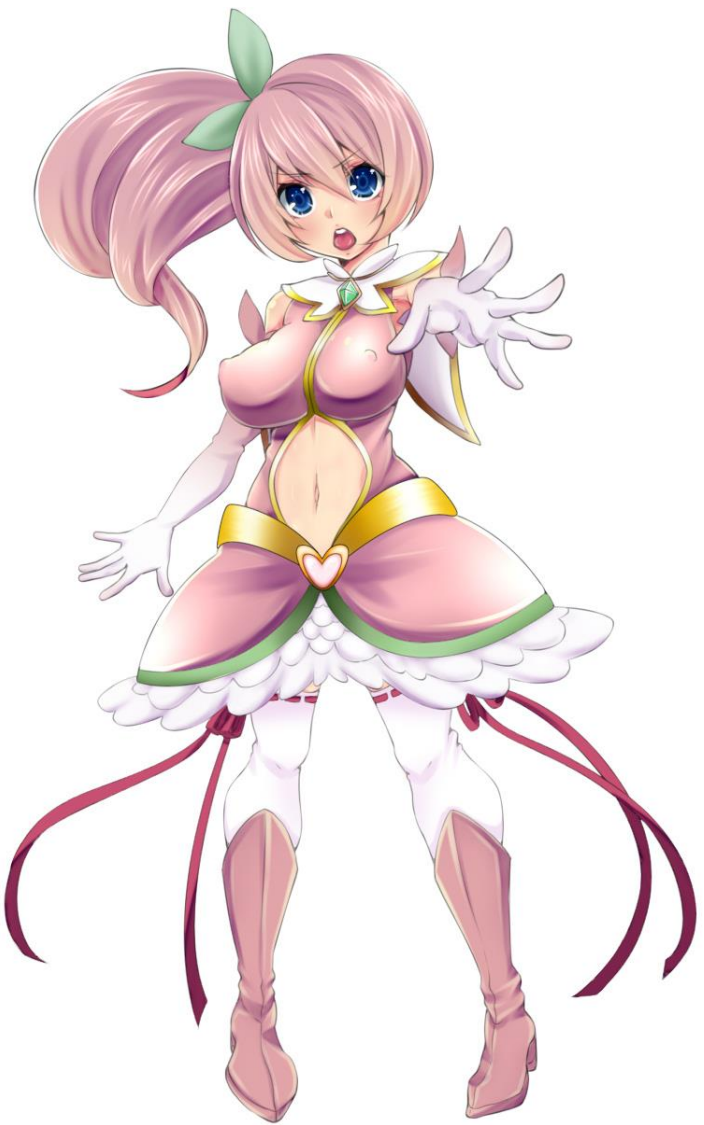


精液や愛液の汚れは一瞬で綺麗に浄化され、制服も一気に光の粒になる。この瞬間って、裸のシルエットだけになって恥ずかしいんだけど、今はそんなこと言ってる場合じゃない。そして、一瞬ののちに白とピンクを基調とした上着、茶色系統から淡いピンクの髪、スカートから一気にソックス、靴まで光がはじけて魔法少女の衣装が。うん、大丈夫ちゃんと変身できた。



あとは、目の前の雑魚戦闘員を一発で倒して、ええと、まあお母さんを元に戻そう。
お母さんの方を見るが相変わらずぼやんとした状況が飲み込めてないようだ。いろいろ片付いたら怒られるかな……

【ジュエル・ピンク（御船ノノ）は自室で魔法少女に変身すると戦うための力を体に通せなくなる】

「変身しちゃえば私一人でも……う、え？、力が……」
え、立てない。足に力が、というか、手にも体にもほとんど力が入らない！？
「くつくつく、魔法少女に変身させたのはわざとだ。この前の確認でその姿でもかけておいた催眠は有効だと確認できたからな。しかも、今回は1週間念入りにかけたから前回のように時間制限はほぼないと思ってもらおうか」

勝ち誇ったように宣言するオプト・ムーンの怪人A。やられた、魔法少女に変身することに罫を仕掛けられていたなんて……催眠のせいかな、立ち上がることもできない。

1歩前に出ていやらしい手つきで私の腕をつかもうとしてくる。

「今回はピンク、お前がかかっている催眠を完全に仕上げるために仕組んだことだな。今日中にお前の心をぼっきり折ってオプト・ムーンの構成員に洗脳してやるよ」

な、なんてことを。甘く見ていた。うう、何か手は、ここで負けちゃったら私はともかくお母さんまで洗脳されちゃう!?

そこへお母さんがAと私の間に身を割り込ませてAに向かい合う。

「お、お母さん……」

「最初は私にサポートさせて頂けないでしょうか？ 娘のあんな姿を見たらちよつと我慢できなくなっちゃいました」

お母さんの洗脳が解けたと思ったけど、だめだった、そんなあ……

ダメだ、完全にAの催眠洗脳にかかっている。魔法が使えればあんな洗脳なんて何とかするのにつく、こっちも無理だ魔法の力が全然まとまらない。

「初めてみたいだからお母さんが優しくリードして上げるね」

そういうと、お母さんは私をベッドに連れて行き、抱きかかえるようにベッドに座った。後ろからのぞき込んでいるお母さんの顔は、こんなありえない状況なのにいつもの笑顔だけど……

「うーん、かわいい衣装ね。こんなかわいいの着ていたなんてお母さん知らなかったわ。でも、これからエッチに食べられちゃうからちよつと脱ぎ脱ぎしましょうねー。ふふ、さすが親子ね、ほら私の乳首とそっくり。これはいじり甲斐があるわ」

あ、いや、そんな優しい顔であそこに手を伸ばしちゃ!?

クリトリスを指先で弄ってえつ、はう!?! 電気が走ったように感じちゃう!?!?

「ひゃ、あ、だめ、やあ!?!」

え、ええ、うそ、あ、ひゃあああ、んん、ん、いや、じ、自分ですのど全然違う!?! あ、え、えええ、そこはあ!?!

「あ、ん、お母さん操られているの。だめ、ひゃあ!?! 又、脱がさないで……正氣に戻つてよ!?!」

「かわいい、声。もつと気持ちよくしてあげる♡」



あつさり、胸の部分を捲し上げられてぷっくりと立っちやっっている乳首が丸見えにな
つちやう。もうそれよりも何倍も恥ずかしいところ見られているけど、やっぱり恥ずかしい
ものは恥ずかしい！？

「はい、さつきオナニーしていたから前戯は必要ないようだけど、体がまだ固いからほぐしちゃいましょう」

「んひゃあ！　そこ、だめえ……変な声出ちゃうの　あ、あつ、あんひゃある！」

お母さんの指でクリトリスの皮が剥かれちゃった。ええ！？　いや、そこおしりいっ！？　あ、入り口ぐりぐりしちゃだめ！？　ああ　ん、前と後ろから、んんん　いや、声が漏れちゃう！　イっちゃう！？　イクの止まらなくなっちゃうううう！？

「あらあら、お客さんの前ですよ。きちんとしなさい。もう、元氣なのはいいところなんです」

いきすぎてぐったりとしている私は、もう完全にお母さんの指でされるがまま。愛液で新品だったパンツもぐっちゃぐちゃになって足に引っかかっている。せめて、Aをにらみつけようとしたけど顔にもうまく力が入らないよう。

「ささ、準備できましたよー、どうぞ」

まるで、手作りの料理をふるまうような気楽さで足を広げられて、Aに大事な部分をさらけ出される。

「それじゃあ、いただくとするか」

「や、やだ、見ないで……」

今までにやにや見ていたAが近づいてくる。うう、まだ全然体に力が入らない……

というか、リビングで見た時よりも大きくなってない！？　あ、あれ入れるの？　いや、え、無理、無理無理！？　え

「ひゃあ！？　こっち来るな！　変態！　いや、そんな・・・んぶ、ん、むーんんん！？」

「もう、もつと殿方を誘うような色っぽい言葉を選ばないと、その辺はあとで教えてあげるから今はさつき出してもらった子種で我慢しなさい」

お、お母さんの指が口の中に！？　あ、ひゃん、これ、あいつの精液ついている。ちゅぶ、だめ、え、匂いでまた発情しちゃう！？

「ふふふ、A様のおちんちん、凄いでしょ。これでノノちゃんも大人の仲間入りね。でも、これだけ発情していたら入れた後に凄いことになりそうね」

きゃ！？　あ、アソコに……いっつあ！？　ふあ、入ってきちゃったあ、あ、あ……い、痛くない？　あ、変身しているから痛みも鈍くなって……ひゃ、あ、まずい、痛みがないから、あ、あつ、ああ、形がわかつちゃう。ああ、あいつのアレの形に私の中、広げられて、ひい！　だめ、さつきので気持ちいいのが続いて……！？

「そうこなくっちゃな、初めてにしては十分な濡れ具合で母親にまさる名器だからもっと楽しませてくれよ」

「ふふふ、さすが私の娘だわ。はい、もっと自分から膣をしておチンポの形を味合わない」と

「ひゃ、そんなところつねっちゃいや!? うう、お母さん正氣に戻ってよう……」

「だーめ、です。もう、お母さんはしっかり洗脳されちゃってAさんに身も心もささげちゃいました。だから、ノノちゃんも抵抗しないで楽になっちゃいなさい」

いつもの優しい笑顔で容赦なくクリトリスと乳首をいじられる。巻き込まないって決めたのに、守りたかったのに。

「そ、ひゃ!? ん、そんな……この、ぜ、ぜえったいに許さない!」
目だけはそらさずにあいつをにらみつける。

「もう、早く堕ちちゃえば楽なのに。わがままな娘ですみません」

「ちよつとぐらい活きが良いいのもいいアクセントだ。それに、一度堕ちてしまったらこんなプレイは楽しめないからね」

「まあ、それもそうですね」

「ん、んんん!? くちゅ、はぶ、んんん……っく、でも、今は耐えて、あ、皆を。ホワイトなら、んんん、ひゃ、お母さんも直、せるはずだから……」

そう、耐えていればいつかは皆にうちの異常が伝わるはず。すくなくとも、明日の昼前に学校にも本部にもいかなければ誰かはうちに来る。

「さて、そろそろ、いいか?」

だから、耐えないと……って、え、そろそろ、何? え??

「っく、ん、え、え!-?」

あ、ああ、おチンポの頭が膨らんでいるのがわかる。だ、だめ、今出されたら!?

「ノノちゃん、初めて男の人の精液を注がれちゃうのね。きっちり子宮まで満たしてもらって感じましょうね」

「いや、それは、あん、ひゃ、そ、外……」

だめ、耐えないと、ん、精液、精液が……ああ。

「しっかり受け取れよ!」

「あ、ひゃあああああ……!? だしてる、びゅー、びゅー、びゅー、て、ああ、リビングでお母さんのおくちにいっぱい出してみたいにああ、た、たへりやないと、凄……はう、ん、なかが満たされて、いや、ああ、だめ……!-!」

「すっごい感じているのがわかるわ。ノノは幸せ者ね」

お腹の下の方が温かい感じで満たされていてなんだか幸せな夢を……

「つく、う……ひゃ!？」

気を失っていたのは数分だったみたいだけど、いつの間にか部屋の中央に置かれた椅子に座らされていた。目の前にはお母さんといちゃいちゃしてるA。つく、ううらやましくなんて……違う、違う!？

「ま、まだだもん。心さえ負けなければ……明日のお昼前まで耐えれば……」

Aの自信ありげな態度は崩れない。タイムリミットも想定済みのようだけど……

「うんうん、って何自分だけで納得しているのよ!？ あと12時間ぐらい楽勝よ!」

「そうか。それじゃ、ハンデをやろう」

「とりあえず、1時間。そこで休憩していいぞ。まあ、寝るのは禁止させてもらうがな」

え、ハンデ? 1時間……何考えているの?? 余裕こいて1時間手を出さないといってきたけど、絶対罠に決まっている。う、受けるしかないんだけど……負けなんだからっ!

「あら、いいんですの?」

って、だめよ!？ 代わりにお母さんを犯すって……ああ、お母さん凄く嬉しいそう。ごくん。

「そのかわり」

「ひゃ、ん。お望みとあれば。はい、お相手させていただきます」

「お、お母さんのそばによつて、ああ、お母さんのおしりをもみしだくな!？ つく、ぶん殴つてやりたいのに!!」

「え、だめ。お、お母さんを犯すぐらいなら私が!」

「っは、そんな震えたからだを抱いても面白くない。しっかり、母親の痴態を参考にするんだな!」

つく、催眠の効果か腕が後ろに組まれて、顔もベッドの方向にしか向けられない……

「あは、娘の中のお汁とザーメンが混ざつて、おいしい。ちゅ」

あ、わわわ、お、お母さんに私の中に入っていたおチンポなめられちゃっている。ああ、あんなおいしそうに。たっぷり出された精液が、あ、う、つく、私まで唾液が……いやいや、だめ、ここはお母さんを弄ばれて怒るところでしょ！？　な、なんで……うぐつ、ん、はあ、うらやましいなんて思っちゃダメ！？　どうにかして、お母さんの催眠洗脳を解かなきゃいけないの！

「ああ、凄い。あれからもう何回も出しているのにまだまだこんなに硬い！」

お、お母さんのおまんこ、すっごくエッチな形だ。はう、すんなり飲み込んだ。ああ、わ、私の時もあんな感じだったの！？　うう、ぐつちゅぐつちゅ、ぱんぱんぱんって肉と汁の音と……ああ、これ雌の匂いだ。私がオナニーしていた時の匂い。はう。

「ひや、ご、ごめんなさい。私おしりよわ、いい、あ、ん、奥までたたいている！？　ん、ん、ん、つく、手が固定されていて動かせないよう。ああ、私のおまんこ凄いことになっている。まるでやだれ垂らしているみたいにくっしゅぐしゅだあ、はううう。

「こんなにイったの初めてです！？　ひや、もうだめ。こんなの覚えたら元に戻れない！」
一時間、しっかりお母さんは犯され続けた。いや、嬉々として絡まりあっている。催眠洗脳されていると知っていても……

たまにかけられる侮辱の言葉にも「つく、あなたが催眠で操っているんですよ」と、一言二言返すのがやっと。ダメ、ここでくじけちゃったら……ああ、お母さんそんな顔しちゃ、うううう。

「きっかけはそうだが、俺がやったのは意識の一部の改変だけで理性のタガには手を付けてないぞ？」

「だって、10年。あの人が死んじゃって、ノノの育児もあって、20代はずっとご無沙汰でえ」

「もう、年だし、ノノが育ってくれたらいいかなってあきらめていたら……ひや、ん、こんなすごいので攻められたら、ああん！」

あいつのおチンポ突きつけられて嬉しそうに鳴くお母さんの声が脳にしみこんでくる。うう、聞きたくない。聞いちゃダメ。ダメなのにい……

「ううう、お母さんのそんな姿見せられたら……」

ベッドで座りながらおチンポを入れてもらっていたお母さんにあいつは何か耳打ちをす

る。

「あ、はい、わかりま、んん、したあ」

「それじゃあ、ご褒美だ！」

「ああ、またあんなにいっぱい。ごく」

「ひゃあああ！！！　すごい、私もイっちゃあああ！！！」

「だめ、耐えないと。つく、精液とお母さんのおいが混じって……ん、ひゃうる」

ぽーっと茹った頭の片隅に「1時間たったな」とAの言葉が入ってきた。

視界の隅に見える時計は12時すぎ、あれからちょうど1時間だ。

そう、休憩は1時間だけで、あとは……

「ノノ」

「ひゃ！？　母さん！？」

お母さんがいつの間にか私のそばまでやってきていた。さっきまで獣のように喘いでいたのに今はもういつものお母さんだ。裸で精液と愛液まみれだけど、やっぱりホツとする。

「もう我慢しなくていいのよ？」

「う、いや、だめ。だって、まだ……」

みんなに、この魔法少女の衣装に誓ったんだ……もう、いろいろぐっちゃぐちゃになった頭でわずかな奇跡にかけてお母さんの顔を見上げる。ああ、いつもの優しいお母さんの顔だ。

「うーん、自分じゃ気づかないのかな？」

ちよつとしたずらをしているような、なぞなぞを出しているような表情だけど、とてもいやな予感がする。だめだ、これ以上聞いてはいけない。

「え？」

「さっきまでの衣装もかわいくてよかったけど、その姿もえっちで素敵よ？　そんな姿になってまでおちんちんを誘っているのに、本当はもう心も堕ちちゃっているんじゃない？」

「いって、入り口のそばにある鏡を指さす。あ、ああああ！？」

「う、うそ！？」

【ジュエル・スターズ（御船ノノ）は魔法少女に変身した状態で部屋の鏡を見ると自分の衣装が堕ちた淫靡な衣装に見える】

お母さんに指さされてみた先には、いつも制服に着替えるときに使っている大きめの鏡があった。ちよどこちらを向いていて私の姿がしっかりと映っている。そう、黒くエッチに変化した魔法少女の姿の私が。

私の魔法少女の衣装は私の正義の変身ヒロインのイメージで出来ている。それが、こんな1時間前の私なら恥ずかしさでしゃがみこんでしまいそうな姿になっちゃっているってことは、

「あは」

ちよつと笑ってしまった。

「頑張ったのに、ほんととは最初から気持ちよくて流されそうで、お母さんまでおしりやアソコをいじってきて、守ってきたのに、大切な家族だったのに……」

「私は今も大事な娘だと思っているよ？」

お母さんが優しく抱きしめてくれる。ああ、もういいか。

「だから、ね」

「……うん」

「あ」

落ちてしまったせいかわ、もう攻撃する意思がなくなったからか、きちんと自分の足で立てるようになっていた。

立って、くるつと一回転してみる。もともと露出が多かったおへそからクリトリスのちよつと上の部分まではすつかり丸見えで、前だけ空いているスカートはとっても下品。胸から腰にかけて広がる鳶のような模様もおっぱいを引き立てていて、エッチな今の私にぴったりの衣装になっている。

色調の方ももとは白とピンクと緑の絹のような材質だったのに、黒を基準としたエナメル質の光沢を放ち、淫靡などぎついピンクのラインが自分で見ても欲情を掻き立てられる。

鏡に映る私はとてもとろけた顔でこれからの行為を楽しみに笑っているようだ。

A、いやA様に向き直り、頭を下げて謝る。

「わ、私の負けです。もう我慢できません。お母さんだけです。魔法少女失格でも構いません。だから、私にもつとっぱいザーメン注ぎ込んで欲しいです。」

そういつて、A様の前まで歩いて行って膝たちになっておチンポの先っぽにキスをする。お母さんは後ろで見守ってくれているみたいだ。

「ん、ぴちゅ。はう、ザーメンまみれのおチンポおいしい……、はむ、んん」

丁寧におチンポにしたったっているお母さんとA様の体液をなめとってきれいにする。

嫌悪感なんてもうすっかりなくなっているし、たぶん今私はリビングで奉仕していたお母さんと同じようにうっとりとした表情をしているんだろう。と、思いながらお母さんの真似をして頭を思いつきストロークさせている。

「出すぞ」

「んん、ん、こふ！？ ん、こく、ん、ん。ふは、あ、裏すじにも残りが。ちゅ。ん」

尿道に残ったザーメンまで1滴残さず飲みこんで、はう、と幸せそうな顔でA様を見上げる。私のご主人様だ。そう思うと、胸がきゅんとすると同時に何か大切なものが零れ落ちて行つた気もする。

「あはは、A様の臭い、味、舐めているだけでおまんこびしょびしょになっちゃいます。あの時からずつと虜でした」

「それじゃあ、完全に墮としてやるよ」

そして、準備ができた。ぐつちよぐちよに濡れたベッドにまるで夫婦のように抱き合つた形で入れてもらっている。これから、A様のおチンポを突き立てながら隷属の命令を書き込んでもらうんだ。とっても、エッチで淫乱な私にふさわしい初夜だ。

『それじゃあ、完全に墮としてやるよ』という、A様の言葉だけでイきそうになる。もちろん、答えは「はい！」だ。完全に完璧に、もう元に戻れなくなるくらい染め上げてもらえる！

「つは、母子まとめて面倒見てやるよ」

「あ、あ、あ、あ、凄！？ さっきと比べ物になりやない！ ああ、もうだめお母さんと同じで私もA様のものですう！！ ノノの全部塗りつぶしてください！！」

私の膣の奥にA様のおチンポがたたきつけられる。おチンポの頭の方で押し込まれていく感触が凄く感じちゃう。一突きされるたびに頭の中が真っ白になって、もう、私の馬鹿、なんでもっと早く堕ちなかつたんだろう。こんなに気持ちいいのに。

『魔法少女は廃業だな』 いままでもすつと入ってきたA様の言葉が心の奥の一番大事なところに張り付けられる。

「はい、御船ノノはもう魔法少女でも、正義の味方ジュエル・スターズでもありません」
みんなのために戦ったジュエル・ピンクはもうどこにもいなくて、ここにいるのはただのおチンポ好きでザーメン狂いのメスです！

『A様の命令には絶対だ』 A様の命令が心の一番大事になどところに届くと、あそこから蜜が垂れて一層水音が凄くなっちゃう。

「はい！ ノノはA様の奴隷です！ どんな命令でも仰せのままにいい！！」

ああ、奴隷って言っちゃった。それだけで、幸せすぎて目の前がちかちかしちゃう！？

『仲間の命や尊厳も差し出せ』一瞬、みんなの顔が浮かんだけれど全部、A様の言葉で塗りつぶされちゃった。あは。

「……え、ひゃ、んん、く、ふあ、は、ひゃい、みんな差し出しちゃいます。レッドも、ホワイトも、あ、ん、あ、あ、ブ、ブルーも。基地のみんな全部、差し出しちゃいますう!!」

『御船ノノはこれから永遠にオプト・ムーンの忠実なしもべだ』はうん、もう、頭のとっぺんからつま先まで催眠で洗脳されちゃった。あはははは。

「はい！ メス奴隷のノノはオプト・ムーンにえいえんの、あ、ひゃ、ちゅうせいを、ち、ちかいま、す、ああああ!!!!!!」

全部言い切ったと同時に中にいっぱい注いでもらった。そのまま、体の体液を全部出すよな、至福感でいっぱいになって私は意識を手放す。もう、我慢しなくていいんだ。

ごめん、みんな……でも、気持ちいいから仕方ないよね。ふふふ。

あ、そうだ。みんなもこっち側に堕としちゃえば……